卒業生に訊く

あらゆる研究課題や興味に全力で応えてくれる学びの場

東京大学教育学部では、どのような学びや経験が待っているのでしょうか。
その魅力を熟知しているのは卒業した先輩たちです。2017年に卒業した堀菜保子さんを卒業生代表としてお招きし、勝野正章教育学部長が深くお伺いします。

勝野 正章 研究科長・学部長
［かつの まさあき］

堀 菜保子さん
［ほり なほこ］
2017年教育実践・政策学コース卒業、NHK入局。「おはよう日本」キャスターの傍ら、人権に関する取材・番組制作に従事。2023年シンクタンク転職。2025年教育学研究科進学。

優しい社会づくりを志し選択 多様な経験や価値観を持った仲間に期待

勝野 正章教授（以下、勝野）　8年振りの再会ですね。今回は卒業生である堀さんに、東京大学教育学部での学びについて、またお仕事のことなどいろいろお伺いしたいと思っています。まずは、堀さんが教育学部を選んだ理由からお話しください。

堀 菜保子さん（以下、堀）　母が小学校の教員をしていたため、教育が身近にあったことはひとつ大きな理由です。それから、私はずっと「優しい社会をつくる一助になりたい」と思っているのですが、その社会をつくる上で礎になるのは教育だと、母の姿を通して感じていました。優しい社会の実現に少しでも近づけるような学びがしたいと、教育学部に進むことを決めました。

勝野　優しい社会というのは、具体的にどのような社会をイメージしているのでしょうか。

堀　一言でいうと、誰も取り残されない社会です。小学生の頃から人種差別や奴隷制のことを調べていたこともあり、生まれや属性などといったもので理不尽に差別されず、一人ひとりが尊重され生きていける社会をつくる一助になりたいと思うようになりました。

勝野　なるほど。そういった思いを胸に教育学部に来て、教養学部と比べて感じた違いなどはありましたか？

堀　現状の社会に対して課題を感じている人が多いのかなというのが最初の印象でした。属性としては女性も多く、地方出身者の割合も高かったですね。私自身も卒業した高校は千葉県にありますが、16歳までは四国にいました。「女性として」や「地方出身者として」、相対的に日本の教育や社会を見てきた友人が多いという体感がありました。

教育学部での学びを通し肌で実感したデータと現場の両方を見る重要性

勝野　確かに女性や地方出身者の割合が多いのは、教育学部の特徴のひとつです。そういった様々なバックグラウンドを持った人たちと関わることで、視野が広がったり発見したりしたこともありましたか？

堀　社会教育学演習の授業で長野県飯田市に実習に行ったことは、とても印象に残っています。実習に参加したメンバーは出身も経験も考え方も様々です。少人数のグループに分かれて民宿に泊まり地域の方もまじえて話したり、現地の高校生と交流したりする中で異なる感じ方を言語化したことは、自分の見えている世界を相対化する大切な経験になりました。

勝野　小規模のグループで実施する作業ならではの気づきだったの

かもしれませんね。ほかにも、そういった共同で取り組んだものはありましたか？

堀　「中学・高校で部活動を担当している先生の働き方を考える」というテーマでグループワークをしたときには、3人1組で取り組みました。3人で横浜市教育委員会や本郷※の中学校の校長先生に話を聞きに行き、その話を教室に持ち帰ってみんなで議論するという内容でした。

※東京都文京区の地名、東京大学教育学部の所在地

勝野　そのワークは、記憶にあります。教育行政調査演習の一環ですよね。現場での調査や収集から学ぶことが多かったようですね。

堀　そうですね、理論と教育が実践されている現場の両方を往復した学びは、とても大きな糧となりました。その集大成は、卒業論文です。「主権者教育におけるNPOの役割を考える」というテーマに取り組んだのですが、文部科学省からの通達や論文、世に出ているデータを読み解いたあとに、高校の先生や生徒、そこに関わるNPO職員などにインタビューを実施し、データと現場の両方を調査しました。そこで見えてきたのは、データや文献から見えることは一側面でしかないということです。たとえば、主権者教育を実施している学校は6〜7割と公表されていたとしても、実際に先生や生徒に話を聞いてみると、一度模擬選挙を行っただけで「主権者教育を実施している」と回答していたり、「政治的中立性」の捉え方に迷ってほとんど実質的な教育がなされていない学校があったり。「現状の教育に満足していない」という生徒の声が聞こえてくることもありました。このギャップは、文献やデータから見えることと、実践の場にいる人の声を組み合わせることで明らかになったことです。この「両方を見る大切さ」を学んだ経験は、社会人になって飛び込んだ報道の仕事にも生かされました。また、両方を見るとはちょっと違いますが、星加良司先生のディスアビリティ・スタディーズが、とても印象に残っています。

勝野　障害の社会モデルなどを扱った、学部横断型カリキュラムですね。

堀　はい。この授業での学びは、社会を見る目を広げてくれました。社会モデルを知る前と後では社会の見え方が全く違いますし、自分自身の立ち位置も強く意識するようになりました。また、たとえば障害のある人のほうが災害に巻き込まれやすいなど、「被災と障害」の関係性についても考える時間にもなり、これもNHKで震災報道に関わる際にも活きました。

勝野　なるほど、大学での学びが仕事につながっているのですね。様々なことを学んでこられたわけですが、教育学部での学びや経験を音楽に例えるとどんなイメージですか？堀さん、ピアノをされていたでしょう？

堀　難しいですね（笑）。そうですね、あまりテンポは速くないかもしれないですね。大きくて華やかなオーケストラで演奏する交響曲のような感じでもなく……。一人ひとりの個性が際立つような、少人数規模の小さなセッションかもしれないですね。あくまでも私のイメージです（笑）。

地域に根差したNHK職員だからこそ再度実感した視点の複数性の重要さ

勝野　先ほども少しお話がありましたが、堀さんは卒業後、NHKのアナウンサーとして活躍されていましたね。アナウンサーという仕事を選ばれた理由を教えてください。

堀　アナウンサーのなかでも、「NHKのアナウンサー」になりたいと思っていました。NHKは全国転勤があり、いろんな地域に行けるのが魅力のひとつです。それともうひとつ、NHKのアナウンサーはテレビの前で伝えることだけが仕事ではないんですね。自分自身で一から企画を立てて取材をし、記事を書いたり、テレビやラジオの番組を制作したり、いわゆるディレクター業務にも柔軟に取り組める環境があります。私は佐賀と札幌、東京に赴任しましたが、それぞれの地域に根差し、地域の人と関係を築いて住民の暮らしや地域が抱える課題などを取材し、番組をつくる。そのうえで最終アンカーとして自分の言葉で伝えることができる、この一連のすべてに携わることができるのはとても魅力的でした。

勝野　具体的には、どのような番組を手掛けられたのですか？

堀　障害やジェンダー、DV、LGBTQ＋など、「人権」を軸に据えたいと思っていたので、幅広く人権についての番組に携わりました。特に価値観がガラッと変わったのは、佐賀から札幌の放送局に移動したときです。私が佐賀放送局にいた2018年は、明治維新150年のメモリアルイヤーでした。佐賀放送局では県庁とも連携し、大隈重信や

北海道初代開拓判官・島義勇をはじめ、その時代に“活躍した偉人”たちについて放送していました。その後、2019年に札幌放送局に移動し、博物館でアイヌの人たちが辿ってきた歴史を目の当たりにして、何とも言えない恥ずかしさと申し訳なさでハッとしました。こうした歴史を意識せずに放送に携わっていたことに、自分の無知さと加害性を思い知らされました。そこから北海道アイヌ協会に行ったり、アイヌの学生に奨学金を出すプログラムがある大学に取材に行ったり。アイヌ民族というだけでつらい経験をしてきた方たちの話を聞き、番組をつくったこともありました。知らないということは、人を無意識のうちに傷つけてしまうということを身につまされたこの取材は、私の取材の原点になっています。

勝野　一方から見たら地域の偉人・英雄だけれど、もう一方の視点では必ずしもそうではないかもしれない。その視点の複数性の重要さに直面したことで、堀さんのものの見方が広がったり深まったりしたのでしょうね。反対に、つらかった仕事はありましたか？

堀　つらかったというわけではないですが、性被害を受けた方や精神疾患を抱えた方の取材は、特に印象に残っています。取材者という立場だからこそ聞けることがあるのですが、いかに傷つけずに話を引き出すのか。あるいは信頼関係を築くにはどうすればいいかなど、かなり考えさせられました。こうした人権に関わる取材、特にマイノリティと呼ばれる方の声や状況を伝えるメディアの仕事にはとてもやりがいや意義を感じて働いていました。と同時に、まさに先ほど出た「社会モデル」と重なる部分がありますが、様々な人の生きづらさを取材するうちに、「社会」はなぜ今こうなっているのか、社会を形づくる制度や政策はどのようにつくられているのかを知らなければ、理解が一面的になるのかもしれないという思いが膨らんでいきました。

勝野　そこで大きくシフトチェンジして、民間のシンクタンクへの転職を決めたのですね。思い切った決断でしたね！

大学院進学の決断を後押しした民間シンクタンクでの「人権」の仕事

勝野　アナウンサー時代の経験を踏まえて、ご自身のライフワークである「優しい社会づくり」に近づくための一歩を踏み出されたわけですが、シンクタンクではどのようなお仕事をされましたか？

堀　たとえば、性的マイノリティの人の就労環境改善に関わる調査研究や、介護現場の技能実習生のキャリアについての調査研究、また企業のダイバーシティや人権尊重についての取り組みなどです。

勝野　「人権」に関するお仕事ですね。

堀　この転職のキーワードが、人権でしたので。NHKで、知的障害の人の社会参加を応援するスペシャルオリンピックスの取材に力を入れていたことも、この選択に影響しています。「社会参加」というときに「社会」の側に参加を阻む問題があることは問われないのか、「社会」が意識変容に取り組む必要があるのではないかという思いが募っていきました。速く走れる人たちの基準でつくられた社会に、みんなが合わせなければならないなんて、優しい社会ではないですよね。

勝野　そのとおりです。社会にインクルードしていくときに大切なのは、社会の方がまず変わることです。ただ包摂するだけでは、まったく意味がありませんからね。シンクタンクでの仕事でそういった場面に多く直面したことが、今回の大学院進学にもつながるのですか。

堀　そうですね。シンクタンクでの仕事では、いわゆる無関心層に接する機会が多かったように思います。たとえば性的マイノリティの人が社会にいることは知っているけれども、自分には関係がない、自分は行動を起こす必要がないと思っている人たちです。反対にNHKでは、人権のために戦う人や、社会のひずみにあってその声を奪われている人に取材をする機会が多くありました。同じ社会に生きていながら、なぜこんなに視点や行動が違うのだろう。こうした意識や行動はどういう学びから生まれているのだろうということを、しっかり研究したいと思い大学院進学を決めました。

勝野　社会や人々の意識を変えることで、優しい社会をつくってい

くことが今のゴールということですね。

堀　制度・政策をつくっている方や企業の意思決定層の方と一緒に仕事をしたことで、「社会」のルールを決めるのは結局人であり、その意識や行動がどう形成されるのかを知りたいという思いにいたりました。いろいろなアプローチから優しい社会をつくるための方法や学びを考えていきたいと思っています。

教育を考えることは社会を知る第一歩 教育学部でともに学ぶ仲間へメッセージ

勝野　大学院修士課程では、具体的にどのような研究計画をお持ちですか？

堀　様々な人権の課題に対して、マジョリティ層のなかで自分事として不公正を正そうと活動している人たちは、どのような学びからそうした意識や行動がつくられてきたのかを研究したいと思っています。

勝野　ある意味、堀さんご自身がどういう学びや経験をしてきたかを振り返るようなテーマですね。今、教育学部、教育学研究科でキーワードにしているのが、「インクルーシブな知性」です。さきほど堀さんのお話にあったように、人権が保障されていない状況に対して、事実としてそれを認識してきちんと行動に移せるという知性のあり方は、単に理論だけを頭に入れるだけでは養われません。不公正に対しての高い感度を持ち、適切に反応できるよう知性を身につけることが、教育学部のひとつの教育目標です。その目標にぴったりのお話を、今日はお伺いすることができました。

堀　大学院でもしっかりと学びを深めていきたいと思います。

勝野　最後に、教育学部または大学院教育学研究科を志望しているみなさんに、メッセージをお願いします。

堀　ここには、どんな研究課題や関心にも応えてくださる環境があります。先生方はコースの垣根をまたいで、熱心に指導してくださったりインタビュー相手を紹介するなどサポートしてくださったり。思う存分に研究や学びを取り組むことができます。

また、教育を考えることは、今の社会の成り立ちを知る第一歩です。たとえば、日本による植民地支配やアイヌ民族の歴史、包括的性教育などについての社会の認知は不足していますが、それは学校教育であまり触れられてこなかったことが一つの要因だと思っています。また、メリトクラシー（能力主義）的な考え方などが内面化されていることは日本の教育制度と無関係ではないと感じています。教育学を学ぶことで、「だから自分はこういう考えなんだ、こう思っているんだ」という発見があるはずです。それを一人ひとりが認識することが、社会について深く考えることにつながると思っています。

私もまだまだ知らないことばかりです。これからも学びたいと思っているので、教育のこと、つまりは社会の成り立ちについて、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。

勝野　堀さんのお話を聞いて、社会の成り立ちや変化を自分の生きてきた経験と重ね合わせて考えられるのは、教育学の魅力だなとあらためて感じました。今日はすてきなお話をありがとうございました。

堀　こちらこそ、ありがとうございました。